



資料 14-3 プロジェクトの調査地

すべての寺院を訪れて、寺院の建立年などを調べてデータ化しました。たとえば寺院を一つ選ぶと、関連するデータが下に全部出てきます(資料144)。

年数を入ると、その期間にできた寺が出てきます。

上座部仏教の社会では、出家と寺院を建てるという行動が、地域の歴史をそのまま映しています。このデータを土地利用や農業の地図等と重ねると、宗教だけではなく、その地域の全体の姿が見えてきます。

もう一つの利点は、一つの地域を越えて広い範囲での比較ができることです。資料14-5は、それぞれのお寺にいたお坊さんたちがいつ生まれて、いつ見習僧になって、いつ僧侶として出家したかを示したものです。



資料 14-4 データベースのようす

これが全部出てきます。いわゆる出家行動といいますが、宗教活動のパターンが、同じ仏教圏でも違うことがこれでわかります。このような個人データも、先ほどの寺院マッピングに落としこんで、人間と場所、建物などをトータルに整理できます。

このフォーマットを他の人も使えるようになると、仏教以外の宗教も含めて、より大きな宗教実践と地域社会についての基礎データバンクになるとと思います。

シンポジウム／ワークショップに参加して 世俗と「もう一つの世界」を結ぶ記憶の空間

林 行夫

昨年3月11日からまもなく1年になる。7年を経たとき、東日本大震災後の「復興」はどのような姿をみせているだろう。今回のシンポで研究者のみならず、多方面からの参加者の表情を見て声を聞き、ラジオ番組への参加などを通じて想ったことである。わたくしが垣間見た、2011年を終えようとするアチェは、〈今ここ〉を生きる人々の「気」が充溢する空間のように見えた。

シアクアラ大学津波防災研究センターで学術交流協定を締結してほどなく、ディルハムシャー所長以下研究所のスタッフが会議室をでて礼拝の場所にでた。靴を脱いでマッカにむかって座拝する。アチェでは見慣れた光景だが、つい先程まで流れていた会議の時間をエポケー(括

弧に入れる) するように感じ、ひときわ印象的だった。6日にわたる連日の会議でも、コーランの一節を詠むことから一日が始まり、発表でも話者と聴衆が「アッサラーム・アライクム」、「ワ・アライクム・サラーム」の定型句を挟んだ。教員や学生といった知識人であれ、行政官であれ学生であれ、多くの市井の人々と同じイスラームを、それぞれに生きていた。イスラーム世界で暮らす人々には日常の光景である。大陸部東南アジアの多くの人々も、日本とは異なる仏教を、日々の暮らしのなかで生きている。誰もが日々追われるようにして世俗の社会を生きているが、アチェの人々にもリアリティをもって生きるもうひとつの世界があった。それは、その場に居合わせた人々が

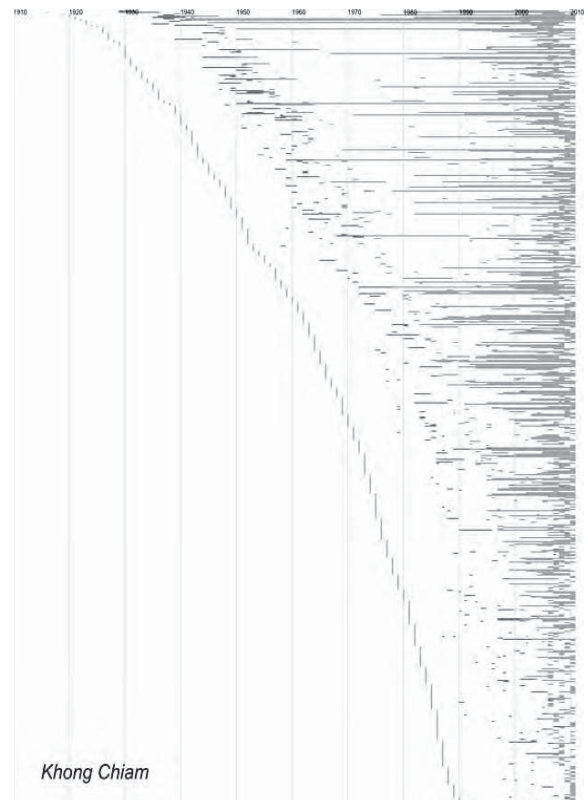
■ 共同研究を積み重ね

地図を使った調査・研究の推進を

このマッピング・システムはシンプルなものです。昨日から紹介されている災害マッピングのフォーマットと基本的には同じです。

データベースについては、さまざまなフォーマットやシステムが開発されていきます。しかし、システムそれ自体は、はやりすたりがあつて、あるときはもう使えなくなってしまうということがあります。ですから、地域研究をしている者からしますと、データベースそのものの美しさを求めるよりは、生のデータがつねに取りだせるように、また、研究者間の議論を深めるためのツールとして、もっともシンプルなデータベースが望ましいと考えています。

地図を使ってデータを整理すること自体はひじょうによいアイデアだと考えます。同時に、地図資料の共有という問題が残ります。山本博之さんの発表にもあったように、地図の使い方、あるいはみんなが地図を利用できるようにするという問題には難しいところがあります。今後、我々が学術共同研究を積み重ねて、学術を目的に必要とされる地図が我々の調査研究に役立つように提供されることを願っています。



資料 14-5 マッピングから得られるデータの例

〈今ここ〉を生きる力となるような言葉と行いがつくる世界だった。

わが国でも「創造的復興」が巷間でいわれる。そこには、科学と技術で災禍や痛ましい記憶を「更地」にもどすような方向と合意がみえる。ところが、アチェでは、その傷跡を、かたちを変えて残そうとしている。廃屋の上に流れついた船をそのまま観光資源とする。犠牲者だけではなく、誰がどこからきて支援してくれたのかを印す公園がある。これからも、そうした施設を可能な限り残しながら整備していく計画がある。会議の合間をぬって、死者を弔う構造をもつ津波博物館やモニュメンタルな施設、被災地の現況や被災経験者を訪問したことは、僅かではあるが、会議での見聞に血肉を与えてくれた。人類史上初の被爆地である広島原爆ドームは「負の世界遺産」といわれるが、痛みを記憶を明示的に残そうとする復興に多くの日本人は違和感を覚えるかもしれない。アチェで観光資源となりつつある場所は、世俗の傷跡でありながら「もう一つの世界」と結ぶ記憶の空間となっていく。そのような輪郭が透かし見えるような気がした。

最終日の7周年記念式典にでられなかったことが心

残りであるが、今回の会議をつうじて熱い思いをもつアチェの人々から学んだことは大きく重い。ディルハムシャー所長をはじめとするアチェ関係者、JICAとともに、シンポを組織した地域研究統合情報センターの山本博之、西芳実両准教授に深く感謝する。とりわけ、休む間もなく通訳の労をとってくれた西准教授には、災禍の前後から同地に関わってきた地域研究者としての深い愛情を感じた。今回の国際会議は、そうした研究者が育んできたフィールドへの愛と希望のもとに実施されたと思う。地球も生きものである。人間が第二の自然環境としてきたわれわれの社会を一瞬にして灰燼と帰す欠伸のひとつもする。あらゆる社会は、そうした環境を日々生き抜いてきた人々の行いが紡いできた。この単純明快にして常に忘却される事実に向き合わせてくれるものこそ、私たち一人一人に課せられた「運命」であり、その事実と共に生きようとする愛であろう。